

## 東松山市・大東文化大学協働研究報告書ブックレット No. 1

### 『有効な農業振興方策』概要

本報告書では、第 1 章において、東松山市の農業の問題点と講じている農業施策を説明している。東松山市の農業の課題として、就農者の減少、農業従事者の高齢化、後継者不足、遊休農地の増加などの問題点を抱えている中で、付加価値の高い農産物を提供できる生産技術と経営能力を備えた都市近郊型農業の確立が大きな課題であり、そのために現在、東松山市農業塾などの新たな担い手対策、ポロタン・オリーブの苗の植付等による遊休農地の解消方策、ポロタンと梨などの特産品の開発、他産地に打ち勝てる戦略作物の育成、J A 東松山農産物直売所の移転リニューアルなどの施策が講じられつつあることを説明している。

第 2 章では、研究期間中に訪問した都市近郊農業の先進地の視察結果で参考となるものを説明している。

- ①平成 24 年 2 月に訪問した埼玉県ときがわ町の「奥畑ふるさと農園」では、川越市近郊の利用者などを対象に農山村交流に努めている
- ②平成 24 年 3 月に訪問した茨城県笠間市の宿泊施設付き市民農園「笠間グラインガルテン」では、都市生活者が中山間地域の農村で生活し「農芸と陶芸のハーモニー」をテーマとする笠間型のライフスタイルを追求してもらうユニークな試みが行われるとともに栗の生産・加工・販売を 6 次産業化した日本一の栗産地をめざしている
- ③平成 25 年 8 月に訪問した越谷市では、農業技術センターが、イチゴ観光農園の経営による都市型農業経営者の育成を推進している  
また同時に訪問した三郷市の「有限会社オオクマ園芸」では、レストラン等の細かいニーズに対応してベビーリーフを出荷販売することで成功した社長から「農業は儲かる、面白い」という自信に満ちた説明を受けるとともに、越谷市内の「有限会社トマト園芸」では、市場出荷をやめて全量直販方式への切り替えで「行列のできるトマト屋」との人気を博している社長の説明を受けた

第 3 章は本報告書の中心で、研究員による東松山市の農業振興への提言として主に次の 4 項目を提言している。

- ①農地を手放さない、しかし営農意欲は乏しいといった農家から、農業公社のような信用力のある公的機関が農地を借り上げて、大規模農家や農業生産法人に貸し付け、営農規模を拡大していくこと、そのためには東松山市農業公社への財政的・人的な支援を行う必要がある。また、大東文化大学学生の実態から見て、自分で営農するよりも、給与所得者としての職を得

れば、勤務先が農業関係でも求職者は存在するとみられるので、都心に近い東松山市内の営農規模の拡大は新規就農者の育成にも有効である。

②地域資源や特産品を活用した 6 次産業化を進めるためには、農業生産法人が主体となる場合が多いが、こうした法人でなくとも農協や直売所と連携して生産―加工―出荷という工程を組むことも可能である。JA 埼玉中央の東松山市内の農産物直売所が拡張移転する機会に、加工所の設置と加工組織の育成に取り組むことで大きな効果がみこまれる。

③6 次産業化を進めるにあたって、大学・自治体・企業がコラボして商品化することも有効である。大東文化大学と山崎製パンの連携による「大豆のパン」、大東文化大学と東松山市と山崎製パンの三者開発の「焼き豚パン」、他大学の例では、三島市の日大と弁当業者による「三島物語おおね御膳」など、「大学は美味しい」が流行っているので、協働研究とともに「アイデア勝負」の努力も必要である。

④東松山市が都心 50km 圏でありインターチェンジも存在するなどの利点を活かし、美しい里山を形成する市内の自然で、都会の一坪農園を卒業した農的生活志向者を受け入れれば、定年後定住することも期待できる。こうした都会住民と地域住民を結びつけるためには、市役所等の公的な機関、農協、NPO などの第三者機関による働きかけが有効である。

また、例えば里山保全基金を創設して谷津田や棚田等の保全農家に補助すること、里山オーナー制度により、農家の保全活動への支援と出資者への生産物の還元、農業体験などの方法も考えられる。

今後増加が予想される、自然を楽しみながら農業を楽しみたいという人々に対して、レジャー農園や市民農園は理想的な空間を提供することになると考える。

第 4 章では、これまでに提言した複数の施策の要素を盛り込んだ土地利用として農林公園モデルを先導的事業として実施することを提案している。

大谷地内 4.2ha の現在の農林公園を新たに 3 区分して、野菜・果樹・そばなどを栽培してもらう「味覚の丘」と、展望広場、フラワーガーデン、丘の滑り台などからなる「花園の丘」、アスレチック遊具、野外活動広場、イベント広場などからなる「活動の丘」の三つの区分から構成し直す。東松山市民だけでなく都心部からも家族づれの来園者を迎えるためには、インターチェンジから農林公園までの道路や案内標識の整備が不可欠である。農産物直売所、スーパー銭湯、地産野菜等を活用した食堂なども望まれる。また、大東文化大学が介在して、もう一方の大学キャンパスが所在する板橋区と東松山市との間で、この公園を利用する板橋区民への何らかの優遇措置を講じて同区民の来訪にインセンティブ措置を講ずることも考えられる。